

やまぐち自然派宣言

共生の思想を深める⑦

庫本 正

表彰受賞者活動紹介

山口きらめき財団理事長表彰

NPO法人水環境地域ネットワーク

山口県環境保全活動功労者

岡谷 政宏

田島 実

藤本 正明

山口県環境学習功労者

配川 武彦

No. 19



特集

「第十六回リレーミーティング」見島の報告

草野 隆司

「子ども樹木博士」を振り返って

早川 善章

会長表彰

やまぐち自然共生ネットワーク

令和2年4月

共生の思想を深める⑦

寄生虫や腸内細菌との共生

庫本 正

人間は自然の中で、様々な環境要素と深く関わりながら進化してきた。私たちの遺伝子にはそれがしっかりと伝達されており、私たちの生命は護られている。

昨年の秋、私はこのことを思い起こさせてくれる体験をした。私の家にはミツバチが巣を作っていた。秋には、スズメバチがミツバチの蜜を求めてやってくる。私も巣の周辺にいて、スズメバチの接近を防ぐ。そんな時、突然一匹のミツバチが私に向かって飛んできた。次の瞬間、目に激しい痛みがはしった。私は手で目をぬぐった。手には一匹のミツバチがつぶれていた。目から涙が流れ、激しく痛んだ。「ミツバチに目をやられた」と叫びながら、家に飛び込んだ。鏡に映し出された眼を見てホッとした。ミツバチの刺針は眼球ではなく、まぶた（まつげ）に刺さっていた。ミツバチが私の目に到達する寸前に、まぶたは閉され、眼球は保護されていた。私たちの体は、太古の昔から、様々な動物や



▲巣分かれでできた群れが飛び立つ

昆虫たちの攻撃的になっていたに違いない。目は幼い段階で完成され、外界を知る重要な器官だ。虫たちは人を攻撃するときには、目を標的にする。そもそも、まぶたができたのも、眼球を保護するためだ。陸上に進出したカエルなどの両生類には、まぶたがある。脊椎動物の早い段階で、反射や本能によって、目は、まぶたで保護される機能ができていたのだ。

*

考えてみると、私たち人類はオオカミやヒグマといった猛獣たちの棲む世界で暮らしていた。ところが、危険な動物たちは絶滅し、私たちの住居も安全かつ清潔になった。私たちの体

でも、抗生物質などの使用で寄生虫や腸内微生物は姿を消しつつある。寄生虫や腸内微生物がいなくなると、アレルギーや自己免疫疾患などの病気が生まれる。

研究者の中には、寄生虫や腸内微生物との共生をスムーズにして、本来の免疫を生かす暮らしを取り戻したらどうかという。

*

共生は現代社会のキーワードだ。日本人は、積極的に山や草原、河などに出かけ、自然体験を積んできた。山岳仏教の山伏たちは雪の残る冷水の滝に身を沈め、体の中に大自然を通した。また夕暮れの薄明りの中で子連れの山犬と遭遇し、緊張しながら犬と対峙することもあっただろう。

猛獣たちのいる自然でなくても、身近な自然で小動物や野草たちが命がけで生きている姿を体験することも大切だ。私たちの生活は野生と共にあることを教えてくれるからだ。

〔参考書〕

ロブ・ダン（二〇一三）「私の体は寄生虫を欲している」飛鳥新社

藤田紘一郎（一九九七）「共生の意味論」講談社

表彰受賞者活動紹介

山口きらめき財団理事長表彰

NPＯ法人水環境地域ネットワーク

代表理事 岡谷 政宏

表彰いただき、ありがとうございます。

今日まで私たちは次の三つのスローガンの下、気が向いたメンバーが数々の事業を行ってきました。

一、きっかけを提供する。

（身近な自然に触れ親しむ機会を提供する）

二、自分たちでもやってみる。

（自然環境の保護保全）

三、仕組みを作る。

（自然保護活動が続く社会）

近年の活動では、「ヤゴ救出作戦」（周南地区の市民プールにてオープン前にヤゴを救出しトンボになるまで自宅で育てる）を設立当初より続け、累計参加七千人を超えました。

周南市中須北地区にて継続調査中の「モニタリングサイト一〇〇〇里地調査」は、七年目の



昨年、二〇一九年SSH（スーパーサイエンスハイスクール）「山口県生徒環境講座」にて活用いただきました。また、様々なところからお声がけいただき、市民活動イベントや、研修に参加させていただくことができました。

この機に、十七年前の設立当初の趣旨を読み返してみました。その一部をご紹介します。

〔趣 旨〕（抜粋）

「私たちWFEN（ウーフェン）は、河川、湖沼、海等の水環境に接し利用する事で恩恵を受けている市民として、その環境に感謝し、次の世代により良い自然環境を継承していくために何ができるのかを皆で考え、行動を起こすために発足しました。」

地域の人々との関係を深め、その地域の環境資源を有効に活用した本来あるべき自然の姿を一緒に考え、地域社会の活性化に貢献していきます。関係機関・団体とも連携をとりながら、提言などの働きかけを含めた協働をしていきます。自然環境の保全・修復・代償というミチゲーション活動を基本理念として事業内容を検討し、自然と共存できる将来の水環境の在り方を考え、行動していけるシステム作りなどの新しいかたちを模索して行きます。」

水に限ったことではありませんが、当初の理念と今の活動がそう変わっていない事にちょっと嬉しくなります。

今後もうるい感じで活動を続けられたらと思います。

ありがとうございました。

田島 実

この度は、山口県環境保全活動功労者として
県知事賞を頂き身に余る光栄と感謝申し上げます。
私はナベヅルの舞う周南市八代で生まれ
育ち、現在も住み続けています。ナベヅルが北
帰行するところ八代ではギフチョウの羽化が
始まり、桜の満開にあわせてギフチョウの舞が
始まり、花見酒でなく蝶見酒を楽しみ、十一月
から三月までは、ビオトープに舞い降りるナベ
ヅルを見ながら正に、最後の樂園を酒と嗜んで
います。三十歳後半、ギフチョウに魅せられて、
文献をもとに八代のギフチョウを求め、烏帽子
カ岳へ行きましたが、ギフチョウの舞う姿を見
る事はできませんでした。その後、北側斜面に
て、ギフチョウの卵を発見し、個人的に保護活
動を続けていました。

一九九〇年、村おこしグループ夢現塾の発足
がきっかけで、八代小学校児童と一緒に保護活
動する事になり、約三十年間児童と共に学び
私自身も児童に沢山の事を教えてもらいまし
た。助けられた事もありました。



減少が続いていけば、田畑が消滅するか、ナベヅルの飛来数がゼロになるか、どちらが先か懸念されます。もちろん里山も崩壊します。当然のことながら、ギフチョウもタガメなど絶滅危惧種の昆虫類も近い将来、八代からいなくなる日が来るのではないのでしょうか・・・？

そんな中、嬉しい事も。八代の空をおおらかに舞うナベヅルです。十三年ぶりに（令和二年二月十七日現在）、十三羽のナベヅルが飛来したのです。しかも、二月三日の第五陣（成鳥一羽、幼鳥二羽）は、親子でなく、八代を知っている成鳥が、出水で親とはぐれた幼鳥を連れてきた可能性があるので。また今季、出水から移送されたツル五羽が放鳥されました。一月二十四日放鳥ツル三羽が防府市内の水田で確認されました。しかし、二月十四日に一羽が舞い戻りました（二回目事例）。そして、二月十七日、残りの二羽が戻ってきました（初めての事例）。なにか嬉しい事例が続いています。第五陣の幼鳥二羽が成鳥になって、八代に帰ってくる可能性があり、出水のツルのDNAが組み込まれることになるかもしれません。

さらに、今季放鳥したナベヅルが近い将来、世界初、八代に戻って来る予感がしています。

山口県環境保全活動功労者

藤本 正明

(NPO法人自然と釣りのネットワーク理事)

周防大島のアワサンゴを見つめ続けて

「瀬戸内海にサンゴがいる。」

という驚きとともに、今から十四年前(二〇〇六年)に周防大島に生息するニホンアワサンゴ(以下アワサンゴ)の観察が始まりました。

当時は観察といっても、四季を通じてアワサンゴの写真を撮り、写真展を開催することでした。その後、ダイバーの間で「アワサンゴが増えてきたね。」「面積が広がってきたね。」「守っていないかね。」と

という言葉が聞かれるようになりまし
た。そこで、十一
年前(二〇〇九年)、
NPO法人自然と
釣りのネットワー
クが、本格的に、
調査・保護に取り
組むことになりま
した。



巻尺で計測する様子

最初に行ったことは、海の中に巻尺を持って入り群落の広さを測定したことです。その時の広さは六百平方メートルでした。しかし、当時はアワサンゴについての研究がほとんどされておらず、参考になる資料がありません。そこで、サンゴの研究が進んでいる沖縄の阿嘉島研究所に足を運びましたが、熱帯域のサンゴの研究からは私が求めている温帯域のアワサンゴについて満足な回答は得られませんでした。そんな中、ただ一つ参考になったのは、東京大学で波利井さんが二〇〇一年に出していた論文でした。それは千葉県館山沖に生息しているアワサンゴを水槽の中で飼育し研究していたものです。

その中に、産卵について「秋に水温が二十三度になると体内に幼生(受精卵)を保有する。」とありました。

そこで、私は調査を始めた年の秋に水温が二十三度近くになると、毎週



▲アワサンゴが幼生を保有している様子

▼アワサンゴ群落を撮影している様子



アワサンゴの触手

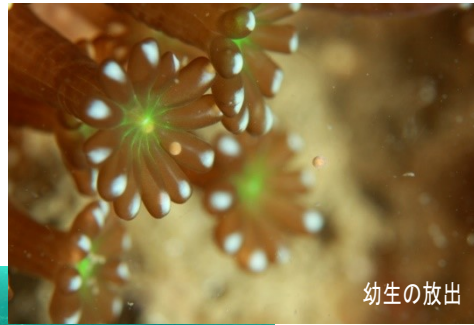


末、アワサンゴ群落に潜水し、アワサンゴの体内に一ミリメートルほどの幼生を探しました。そして、その年に周防大島の海でも秋、水温二十三度になると幼生を保有することをつきとめました。

幼生を保有していることが分かった「体のどこから体外に放出するのだろうか」という新たな疑問が出てきました。触手の中央にある口という部分ではないかという予想はたちましたが、確認できていません。放出は不定期で、その間隔は不規則です。

海底にへばり付いて幼生を保有しているアワサンゴをじつと見つめる日々が続きました。そして、予想通り、口から放出されることが確認できたのは翌年の秋でした。

そうしているうちに、産卵と同時に大量に斃死することが分かりました。



幼生の放出

その原因をつきとめるため、多くのサンゴなどの海洋学者に問い合わせ

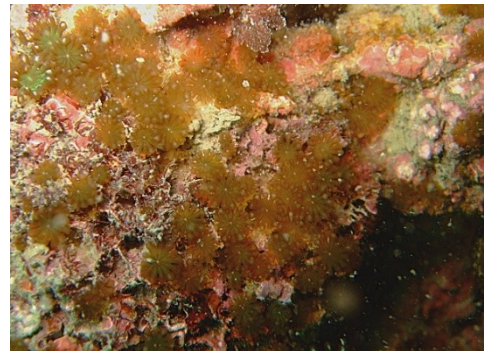
ましたが、これという結論には至りませんでした。そんな時、斃死したアワサンゴの表面にせん毛虫という寄生虫が大量に見つかったのです。今では大量斃死は産卵や夏の高水温などによりアワサンゴの抵抗力が弱まったときに、せ



大量斃死するアワサンゴ

ん毛虫が大量に発生するこ
とで起きると
結論付けてい
ます。大量斃
死を目にして
気が沈んでい
る時に、海底
に放出された
幼生が無数に
着生し、新し
い命が芽生えて
いるのを見て、
ほっとしたのを
今でも覚えてい
ます。その後も、
そのようなこと
を繰り返しながら、
いろいろなことが
分かりました。が、
まだ解明できてい
ないこともあります。

ところで、私がアワサンゴの生息する海に潜り始めて十四年が経ちますが、その間、様々な環境の変化がありました。その一つに水温の変化が挙げられます。最近、海水温の上昇がいわれ
ていますが、このアワサンゴが生息している海でも、冬の海水温が以前と比べて二度くらい
高いのです。冬の海水温の上昇は、水温の低い
のが苦手なアワサンゴにとっては棲みやすい



▲幼生が海底に着生している様子

環境になつてい
るといえます。それ
は、二〇一一年に環境省が調査
したときと比べて、
現在広さは一・五倍の三
千平方メートル、群
落数は二倍の十萬個
になつてい
ることからも明らか
です。今のところは
大丈夫なのですが、
このまま夏の水温が
上昇していくと高
い水温が苦手なア
ワサンゴにとつては
致命的になること
でしょう。これから
地球温暖化の影響
を受けてこの群落
がどのように変わ
っていくのか興味深
い所です。今後も、
引き続き、アワサ
ンゴの海を見続け
ていきたいと思っ
ています。



アワサンゴの群体数調査の様子

▼アワサンゴ群落



山口県環境学習功労者

配川 武彦

(秋吉台パークボランティアの会)

毎年山焼きは二月の中旬に行われる。今年も山焼きの時期である。天候に左右されるので一回でできることもあるが、何度も延期になることもある。日本で一番広いカルスト高原である秋吉台の草原は山焼きにより維持されていて、カルスト台地の周辺部は山林で、当然山焼きは火道の中を焼く。だから、地元の人々は受け持ち範囲の火道を事前に切り、山焼きに参加する。過疎化や高齢化は大きな負担で、ピナクルの多い秋吉台では草刈機も思うように使うのは難しく、高齢者ではなおさらである。そんなことが原因で、毎年草原が狭くなり、場所によっては相当前に出て、草原が後退している。私は地元の人間だから、山焼きには毎年参加していた。消防団にも所属していたので、いろいろな立場で参加を続け、今は完全に自由な立場で、時には不参加もある。

秋吉台の草原は人間の力で作られたもので、万一放置すると森林になるはずである。山焼きをしても、最近のように人の手が入らない場所

ができると、樹木が生える場所が増えていく。秋吉台パークボランティアのメンバーとして、櫛切りに参加した。またすぐ生えるので、一度切ったら終わりにはならない。

山焼きは最近の研究で、縄文時代から始まったかもしれないと言われる。当時は人口が少ない時代で、大規模な草原は考えにくいですが、部分的な草原はあった可能性が高いのではと考えられている。本格的な草原利用は人口増加が大幅に進む江戸時代からではなからうか。しかし、秋吉台は日本最古の本格的銅鉾山のあった場所、奈良

時代の大仏様製造に貢献した鉾山とされる。

発掘調査からかなり規模の大きい鉾山で、多くの人が住み、精錬などの作業をしたよう



▲秋吉台の山焼きの様子

ある。当然、農作物などの栽培や多量の木炭が必要であったと思われる。秋吉台開発の始まりは、この奈良時代の鉾山の始まりと深い相關関係の下で進んだと考えるのが、自然であろう。私は鉾山開発が、秋吉台を里山として、人々の生活の場所に組み込む原点であったと考えている。

秋吉台は山として急傾斜を伴う場所と、なかなか傾斜の場所があり、鉾山の開発が進んだ場所は、なかなか場所秋吉台は人々の生活域の中に組み込まれた。江戸時代の末期ごろから兵隊さんの演習場に使われて、それは昭和まで続く。なだらかな山は、苦勞すれば耕作も可能で、開拓団の入植が、里山化の進行に拍車をかけた。秋吉台の草原利用やドリーネ畑の利用は明治時代が最も盛んであったようで、ケンカが起るほどの激しい利用の状態が続いたらしい。しかし、終戦後は、一遍する。高度成長に合わせ、草原利用も必要なくなり、ドリーネ耕作も止められる。開拓団の離農者も多くなり、農地の荒廃が進む。この頃に近代農業として、もてはやされるようになった畜産や養鶏場が始まる。

一方、秋吉台の文化財としての指定などは、里山の歴史に比較すると大きく遅れるのは当然である。特別天然記念物指定域は、カルスト景観を守ることにもっとも重点がおかれていたようで、草原の中央の主要部分で、周囲の森林部は指定された場所は極めて少ない。後に指定された国定公園はかなり広く、秋吉台の石灰岩分布域全体とほぼ重なる範囲の指定がなされているが、里山利用の障害を避けるような、リンク付けによる差があり、規制は必ずしも強いとは言えない。

秋吉台の地下水系の調査が始まるのはだいぶ遅れてからである。博物館の建設はアメリカ軍の空爆演習反対運動の成果として建設されるが、自然保護関係の仕事だけでなく、地質関係や生物関係や洞窟関係など幅広く探求が進み、地下水系などの調査はやや遅れて始まる。地方の小さな博物館の持つ限界かもしれない。秋吉台にはたくさん洞窟があり、その数もわが国でもっとも多く、また最大規模を誇る秋芳洞がある。秋吉台における地下水系の調査の進行は、トレーサの投入追跡確認調査や洞窟探検により確認されてきた。その結果、秋芳洞地下水系は秋吉台の半分近い面積の集水域を持

つとともに、その幹水系は秋吉台の南縁を沿うように流れていて、特別天然記念物に指定された範囲の地下は極めて少なく、入口の一部だけが指定範囲内で、大半は指定外の地下を流れる。また国定公園についても第一種特別地域は極めて少なく、大半は第三種特別地域以下の範囲の地下となっている。

また、秋芳洞の一番大事な観光洞部分はほぼすべてが、展望台付近の地下にあり、展望の良さなどの条件が合致し、台上見学の拠点となり多くの観光施設の建設が展望台付近で進み、さまざまな自然破壊が進む要因となった。現在の知識からすれば、秋吉台上の排水は大半が秋芳洞に流れ込み、洞窟生成物など変化の環境を悪化させている。また、二カ所の人工トンネルの建設についても、一定量の悪化要因を生んでいる。こうした立体環境の関係を保持する場所は、日本にはほとんどなく、十分な調査を通して、その解決策を考える上からも適地であり、モデル地区で、さらに十分な調査が求められる。

また中流から上流にかけての昔の里山エリアは今では荒廃が激しく、個人所有の土地が広く、特別天然記念指定外で、国定公園の第三種特別地域以下で、別の形で農業関連施設の建

設が行われた。施設からの排水が、秋芳洞地下水系の環境を悪化させていることが確認されている。鉱山時代から続いた里山環境が、放置されヤブとなり、公害を起こしやすい農業施設の建設の中で起こった問題で、保全の難しさである。

ラムサール条約にも登録されている秋吉台地下水系は多くが台の周辺部の地下を流れ、ラムサール条約指定範囲は地下と地上のずれの問題がそのまま残り、遊離した状態である。やはり、自然保全は里山を保有する人たちや、その周辺で暮らす人々が自分たちの問題として考えないと達成することは不可能な問題のような気がする。今、自分たちにできることは、調査してきた資料をまとめ、できるだけ公にすること、少しでも知っていたら、興味を抱いていたことが大事な気がする。生涯のほぼ大半を秋吉台関係の資料収集に費やした割にはたいしたことできていないが、問題や矛盾を確認できただけでも前進であろう。現在、秋吉台パークボランティアの会にも所属し、二十周年記念史の印刷準備もさせていたでいるが、この中でも、里山の歴史と自然環境の保全の問題が裏表の関係にある例もあることが少しでも提示でき、ささやかな前進を期待しながら終わりにしたい。

スケジュール	
10:30～10:40	オリエンテーション
10:40～12:30	島内散策（見島本村地区）
12:30～14:00	昼食
14:00～14:45	通常総会
14:45～17:00	活動発表（4名） 「萩ジオパークについて」萩市ジオパーク推進課 伊藤課長補佐 「見島ウシについて」見島ウシ保存会 多田会長 「見島の野鳥について」見島野鳥の会 珍々鳥クラブ 天賀氏 「見島の植物について」萩市観光課 草野樹木医
17:00～18:00	宿泊先チェックイン
18:00～	夕食・交流会

参加者	場所	日程
五十五名	萩市見島	六月二十九日（土）～三十日（日）

令和元年度通常総会 & 第十六回リレーミーティング in 見島

※台風接近に伴い、急遽2日目は自由行動となった。

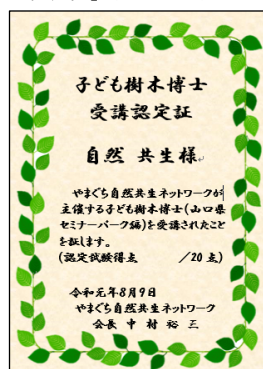


▲令和元年度通常総会 & 第16回リレーミーティング in 見島（@見島ふれあい交流センター）

スケジュール	
9:00～ 9:20	オリエンテーション
9:20～11:00	樹木観察ツアー
11:05～11:15	試験説明
11:35～11:50	採点
11:55～12:00	受講認定証授与

※（公財）山口県ひとづくり財団
環境学習推進センター主催「夏休み
エコ合宿」内のプログラムの一つと
して開催。

やまぐち自然共生ネット
ワークオリジナルの
「子ども樹木博士 受講
認定証」（イメージ）▼



参加者	場所	日程
講師（樹木医）…十名 県内小学四～六年生…二十七名	山口県セミナーパーク （自然ふれあいゾーン）	八月九日（金）午前中

子ども樹木博士

「第十六回リレーミーティング

「見島」の報告

引受理事 草野 隆司

第十五回リレーミーティングで宇部が、平成三十年十一月に小野湖をテーマに開催され、双眼鏡を覗くレンズのはるか遠くで優雅に泳ぐオシドリに魅了され、夜の交歓会は持世寺温泉で大いに盛り上がり、夜遅くまで相互の交流に花が咲いたのは言うまでもありません。

以前より「次回のリレーミーティングはどこでやるか」と言った悩みがチラホラ聞こえてくる頃でした。

やまぐち自然共生ネットワークには、当初の発足時から関わっていたものの、公務や樹木医に関わる事などでなかなかお手伝いには程遠く、リレーミーティングもスケジュールが調整できれば参加する程度で、これまでも地元萩での開催（第七回・平成二十二年）と、周南市鹿野の長野山（第八回・平成二十三年）、山陽小野田市の竜王山（第九回・平成二十四年）の開催に参加した程度。

それでも、そこで出会った皆さんとの熱い想いを語りながらこの会に引き込まれていったように思います。

当会の理事も、萩博物館の堀学芸員から「萩地域での理事をお願いできないか」の誘いも、市役所退職予定もあって引き受けた次第です。

もともと子供時代から引つ込み思案で、人前に出ることが大の苦手とする中、昭和四十年代後半のフォークソングブームに乗り、四十年経った今でシンガーソングライター気取りのこの頃です。

これまでのリレーミーティングも「ギターを持って来い」との指令での参加となり、前回、宇部の交歓会もその流れで進み、弾き語る曲は誰も知らないオリジナルのローカルソング、プロジェクター画像の歌詞が流れる中で、萩市の沖合「萩・見島」の曲の風景は、見島ウシ、青空を舞う大風鬼ヨウズなど、本土では見られない風景画像でした。

体内に染み込ませたビールがステージで歌う曲と共に汗となって吹き出た後、自分の席に戻るとすでにみんなの会話は「次回のリレーミーティングは見島だ！見島に行こう！」とすでに話がすっかり出来上がっていました。

すこし話が長くなりましたが、こんな乗りで、「第十六回リレーミーティングで「見島」は産声を上げたのです。

これまで「島」での開催はありましたが、いずれも橋で繋がった島々であり、まったくの離島での開催は初めてのこと。

県自然保護課の着任間もない中村理事と、「ああでもない、こうでもない」と作戦を立てながら、現地見島で打ち合わせを重ね、「さあ実行！」が近づく六月二十六日が、これまで前例の無い遅い入梅発表。おまけに、二十七日に四国沖の熱帯低気圧が台風三号に発達、本州の前線に湿った空気が流れ込み、各地で激しい雨。翌日、台風は温帯低気圧になったものの、停滞する前線に流れ込む湿った空気の合間をぬっての開催となりました。とはいえ、海上に白波はあるものの、新造船の高速「ゆりや」は比較的穏やかに我々を見島へいざなってくれました。



▲オリエンテーション（島内案内人ご紹介）

当初より雨天を想定して、あらかじめ二日目の予定をキャンセルし、前日を充実した会にする計画で進めることとなりました。

参加者は到着次第、見島ふれあい交流センターに集合、中には低学年のお子さんの参加もあり、和やかな観察会になりました。

センターから道端の植物観察をしながら、国の史跡「見島ジーコンボ古墳群」へ、八世紀から九世紀後半と見られる二百基の古墳群が存在しており、萩から四十五キロメートルのこの島に、当時どのようにして渡ったのか、どんな役職の団なのか想像を掻きたてられます。

離島では珍しい見島ダムは「見島ゆりや湖」として、平成十四年に国土交通大臣の「手づく



▲▼島内散策（見島本村地区）の様子



通常総会の様子

活動発表者（4名）



多田 一馬 氏



伊藤 靖子 氏



筆者



天賀 保義 氏



活動発表の様子

り郷土賞」を受けています。大陸から渡り鳥の中継地として、このダムの意義は大きいものがあります。午後の船便で参加者が到着した頃から、雨が落ち始め「よかったね」と顔を見合わせながら、午後の総会は順調に会議が進展し、事業・会計報告、新年度事業報告など満場一致で採択されました。

活動発表は、萩ジオパーク推進協議会の伊藤靖子さんより、一二〇〇万年前に日本海で最初に噴火した火山で、溶岩台地とスコリア丘など溶岩と見島の成り立ちの発表があり、新たな見島の発見となりました。

見島ウシは国の天然記念物、保存会長の多田一馬さんが「見島ではウシは家族と同じ」今で

こそホルスタインと掛け合わせたウシの「見蘭牛」が高級食材として持てはやされているが、家族と同様「死んでも食べることは無かった」と、貴重な古写真などで見島ウシの歴史を発表されました。

見島公民館長の天賀保義さんは、見島野鳥の会として大陸と日本を往来する野鳥の中継基地としての見島の役割と重要性を発表され、バードウォッチングのメッカ見島を改めて学ぶことが出来ました。

最後に、筆者担当する「見島の植物」として、対馬暖流の真只中の見島にのみ自生する植物ミヤコジマツヅラフジや、暖地性の植物などを画像で紹介、「萩市のホルンフェルス辺りを、

我が国の自生北限とするハマセンダンが見島にないか？」の発見の協力をお願いして発表としました。

見島ふれあい交流センターから各旅館にチェックインで移動する頃から雨足が激しくなり「今の雨で良かった」と胸をなでおろしながらの往復、再度、見島ふれあい交流センターに集合し、交流会の開始です。地元参加者も加わり、それぞれの思いを語り合い。夜遅くまでの交流は大いに盛り上がりました。もちろん、筆者のギターを抱えての舞台は、前会長の白井啓二さんとのコラボのおまけ付きとなりました。翌日は、島を離島する人と個人的に島内を散策する人とに分かれることとなりましたが、高速船ゆりやとのテーブルでは、島ならではの感慨がありました。怪しい天候の中、関係者の皆さんには本当にお世話になりました。紙面をお借りしてお礼とあわせて報告させていただきます。



見送りのテーブルとともに...

「萩・見島」

作詞 池田謙一
作曲 草野隆司

宇部空港降りて	バスに乗り	訪ねて来たよ	萩港
見島通いの	定期船が出る	海の青さに	魅せられながら
心躍らせ	楽しさ胸に	ここは山口	萩 見島
畳が六帖	鬼の絵を	青空高く	鬼ようず
国が指定だ	見島牛	北の灯台	朝日に夕日
今も笠石	昔のままで	ここは山口	日本海
宇津観音は	波のそば	御利益多く	幸福を
大間と並ぶ	八里ヶ瀬	マグロの釣れる	宝の漁場
島の男が	命を燃やす	ここは山口	萩 見島



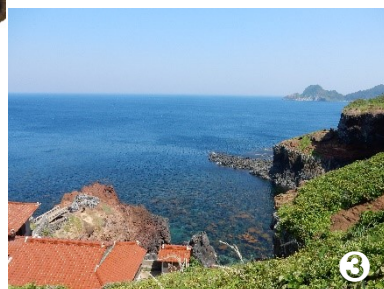
①



②



④



③



- ① 高速船ゆりや
- ② 鬼ようず
- ③ 宇津観音
- ④ 見島ウシ

「子ども樹木博士」を振り返って

引受理事 早川 善章

第二十一回理事会(平成三十年度)において、令和元年度、子ども樹木博士イベントを開催することが決まりました。

「子ども樹木博士」とは、「樹木や森林に親しむことで、人間社会と森林との関わりについて関心を持ってもらうきっかけを作り、将来にわたってそれらの理解と考えを深めてもらうこと」を目的とした活動です。

一般的には、森や公園緑地等を散策しながら樹木を観察し、その特徴や名前を学び、樹木識別試験の正解数に応じた段位を記載した、子ども樹木博士認定証を授与するものです。子ども樹木博士の全国統一の認定基準は、樹木識別試験の正解数により十級から四段まであります(一般社団法人全国森林レクリエーション協会ホームページより)。

子ども樹木博士に対する認知度は低く、樹木の名前に詳しい子どもは少ない状況です。

子ども樹木博士イベントの開催にあたっては、私個人としては未経験の事であり、不安からのスタートです。事業計画をどう組み立てる

か、事前に資料・情報を収集していました。時間がある時は、経験者のもとへ出向き、樹種選定、注意事項等のご指導を頂きました。また、山口県自然保護課の担当者とも作業を分担し、打ち合わせを密に行いました。

やまぐち自然共生ネットワークとしても、子ども樹木博士イベントを開催するのは、今回が初めてです。開催地探しの際、公益財団法人山口県ひとづくり財団 環境学習推進センターが主催する「こども環境学習講座・夏休みエコ合宿『環境博士をめざそう!』(八月開催)」に、「子ども樹木博士」をプログラムの一つとして組み込んで頂くこととなりました。

夏休みエコ合宿は、山口県セミナーパーク(山口市)において、県内の小学四～六年生を対象として、夏休み期間中に一泊二日で開催されます。今回の合宿では、「環境」について学び、山口県の豊かな環境を未来に引き継ぐ力を身につけるため、「子ども樹木博士」のほか、「地球温暖化」や「先人たちと山口県の環境」をテーマとした講義や、新阿武川発電所見学等が実施されました。子ども樹木博士は、合宿二日目午前中の時間を頂き、山口県セミナーパーク内の自然ふれあいゾーンで開催しました。

やまぐち自然共生ネットワークでは、他県での開催状況や、一般社団法人全国森林レクリエーション協会ホームページを参考として、一部オリジナルの手法を取ることとしました。

〈樹木の選定について〉

まず、説明する樹木は、普段から馴染み深いもの、特徴的な葉の形をしたもの、山口県の県・市・町木から選定しました。また、やまぐち自然共生ネットワークオリジナルの「子ども樹木博士 樹木

図鑑二十一種(山口県セミナーパーク編)」を作成し、この中から、二十種を識別試験に出題することとしました。



▲やまぐち自然共生ネットワークオリジナル
「子ども樹木博士 樹木図鑑21種(山口県セミナーパーク編)」

〈樹木の解説について〉

観察時の説明の難しさがあります。今回は、夏休みエコ合宿のプログラムの一つとして実

施するため、子ども樹木博士の開催時間は約三時間程度しかありません。この中で、識別試験に出題する二十種について、散策しながら説明するのに、仮に六十分間という制約がつくと、単純に計算して、一樹種三分間しかありません。移動時間も含めて三分間の説明は至難の業です。最終的には、観察しやすいように、散策コースを設定し、説明樹種に標識テープをつけ、約九十分間の説明時間を設定しました。

〈講師について〉

今回は、参加者である県内小学四く六年生約三十名に対し、講師として山口県樹木医会から十名集めました。参加者を、男女、学年のバランスを考慮し、五班に分け一班につき講師二名（説明者一名、アシスタント一名）がつかしました。樹木医の組み合わせもささと決めました。説明者の役割は、簡単な樹木の解説とともに、五感を使って樹木にふれあい、名前を覚えてもらう状況を作り出し、興味を持ってもらうことです。知識の押し売りは極力避けるように心がけます。参加者全員に共通する解説は、オリジナル樹木図鑑に沿うように注意し、その他の樹木に関する知識解説は、各説明者に任せました。

初めての開催準備のため、段階的に打ち合わせを行い、下見、リハーサルと、会場へは何度訪れることや。自分の経験不足ですが。

〈開催当日について〉

はじめに、参加者に挨拶、班別の説明者とアシスタントの紹介をしました。その後、オリエンテーションとして、散策中の注意事項、スケジュールの説明をしました。

オリエンテーション後は、班別行動とし、準備体操後、各班、事前に決められた散策コースでの樹木観察ツアーを開始しました。各班順調に進み、休憩・復習時間を挟み、識別試験を実施しました。子ども達の真剣な眼差しに感動しました。

〈認定証の授与について〉

採点后、認定証の授与を行いました。

今回は、合宿のプログラムの一つとして開催しているため、子ども樹木博士の後も、別のプログラムが控えている子どもたちの心理を考慮し、やまぐち自然共生ネットワークオリジナルの手法として、正解数に応じた段位や順位は付けず、参加者全員を「子ども樹木博士」として、受講認定証を授与しました。

満点の参加者も二名おり、参加者は、終始、積極的に楽しんで参加している様子でした。

授与終了後は、参加者を見送り、行事が無事に終了したことを、夏の太陽に手を合わせ、感謝しました。



祝 会長表彰

令和二年三月二日、令和元年度やまぐち自然共生ネットワーク会長表彰を受賞された、株式会社鹿野興産（周南市）の表彰及び副賞の記念樹「八重桜 紅華」の植樹を行いました。

株式会社鹿野興産の功績、植栽活動による景観保持、緑化推進や、環境団体と連携した地域活性化に尽力する等長年にわたり自然環境保全活動に努められた功績は顕著である。

令和元年度やまぐち自然共生ネットワーク会長表彰
(令和2年3月2日(月))



左から 中村裕三会長、(株)鹿野興産 田村謙治社長
早川善章事務局長



- ① 記念樹「八重桜（紅華）」の植樹状況
(株)鹿野興産敷地内の斜面に植樹。写真は記念樹後ろ(斜面上)から見下ろす形で撮影。
- ② 斜面一面に、桜・コブシ・もみじ・イチョウなど数千本が植えられ、季節ごとに美しい景観を形成している。

(令和2年3月10日 早川善章事務局長撮影)

贈 記念樹 (紅華)

株式会社鹿野興産 様

貴社は、植栽活動を通し景観保持、緑化推進に努め、環境団体と連携した地域活性化に尽力する等、長年にわたり地道な努力と情熱で自然環境保全活動に精励されました。

よって、ここに記念樹を贈り感謝の意を表すとともにその功績を讃えます。

令和2年3月吉日

やまぐち自然共生ネットワーク会長 中村 裕三

お知らせ

◆ホームページについて

やまぐち自然共生ネットワークでは、ホームページを作成し、情報発信を行っています。主催するイベントの情報、会報誌等を掲載しています。ぜひご覧ください。

ホームページ掲載希望の方は、広報担当へお知らせください。

◆新規会員募集中！

三月一日現在の会員数は次のとおりです。

＊団体会員 四十団体

＊個人会員 九十六名

自然に興味があるお知り合いの方はいらっしゃいませんか。一緒にネットワークの輪を広げましょう。

このたび執筆いただきました皆様には心よりお礼申し上げます。ご意見・ご投稿を、お待ちしております。

広報担当 中村

〈 表紙の写真説明 〉

- ①ヤマネ 体重約 20 グラム樹上性かつ夜行性で生息がわからない代表種
- ②ニホンモモンガ 俊敏に滑空し追跡するのは至難の業
- ③ヒメネズミ 体重約 15～20 グラム森の地下・地上・樹上と活動範囲は広域
- ④ムササビ 里山から山地の森に暮らし、巣の樹洞がわかると観察可能

(写真提供 : 山口博物館 田中 浩 様)

やまぐち自然共生ネットワーク

～次世代につなごう美しいやまぐちの自然～

事務局

〒755-0002

宇部市亀浦三丁目4-50-2 早川 善章

ホームページアドレス

<http://www.yama-kyou.net/>